



発行/市川市市川駅南口図書館(指定管理会社・株ヴィアックス) 〒272-0033 市川市市川南1-10-1 I-linkタウンいちかわザタワーズウエスト3階

深まる秋をクラシックと♪

『おわらない音楽』小澤 征爾

(スタッフ・I)

音楽を読む

日本を代表する名指揮者と言えば、小澤征爾の名前を知らない人はいないと思います。様々な曲を演奏してきた小澤さんですが、特に独特で印象に残るのは、モーツァルトの『ディヴェルティメント(嬉遊曲)K136』です。多くの指揮者が第一楽章『Allegro』を浮足立つようなアップテンポで演奏するのを、小澤さんはゆっくりめの周りの景色を眺めているようなテンポで演奏しています。それは恩師である斎藤秀雄との思い出が込められているからです。自伝『おわらない音楽』によると、死の直前、斎藤さんはこの曲をもって演奏家としての完成形を小澤さんに示しました。小澤征爾の人生、喜怒哀楽は常に音楽と共にありました。是非、彼の指揮する音楽と共に本書を読んでみて下さい。



『おわらない音楽』小澤 征爾

出版社:日本経済新聞出版社
請求記号:762.1/オ
駅南図書館所蔵ありナクソスに
ログインして
アクセス!

『ディヴェルティメントK136』は、ナクソスでも聴いていただけます。サイトウ・キネン・オーケストラを指揮したバージョンもお聴きいただけますので著書と一緒に勧めいたします。

クラシックにふれよう

『グレゴリオ聖歌』

(スタッフ・M)

若いころはハードロックに浸っていた耳も、最近は単純な、モノフォニックな「祈りの歌」を求めるようになった。日本の声明やシロス修道院合唱団のグレゴリオ聖歌などを繰り返し聴くようになった。

ジョーゼフ・ゾルダニアの『人間はなぜ歌うのか?』によると、音楽はポリフォニーから生じたという。歌から分節化した発話が生じ、そこからモノフォニーに発展した。ちょっと常識とは逆だけれど、民族学的・人類学的な調査結果を読むと十分納得がいく。

実際は、声明もグレゴリオ聖歌も、複数の僧侶の個々の息遣いや音質に微妙な間が生まれる。また一般にひとりの人の声にしたところが、一つの音程で歌っていても、実は様々な高い周波数の倍音を同時に響かせているのだという。声明や聖歌を唱え上げる僧侶ともなれば、その倍音はより豊かなものとなる。ひとりひとりの豊かな倍音がポリフォニックに重層されてゆく。声明も古典聖歌も、単にモノフォニーな音楽であるというよりも、モノフォニーを究極に志向する音楽といった方がよいのかもしれない。どうしてもポリフォニックな残滓はぬぐい切れない。

声明も古典聖歌も「祈りの歌」である。ポリフォニックな現実をモノフォニックなものへと収斂しようとする努力・願い。「祈り」とはそもそもが、そういうものなのかもしれない。

参考文献:『人間はなぜ歌うのか? 人類の進化における「うた」の起源』ジョーゼフ・ゾルダニア/著 森田 稔/訳
出版社:アルク出版企画 請求記号:762/ジ 中央図書館所蔵ナクソスにログインして
アクセス!

おススメは『サンティアゴ巡礼路のグレゴリオ聖歌(シロス修道院合唱団)』グレゴリオ聖歌の原点。素材かつ強靱な声の調べに癒されてみませんか。

編集担当のひとこと

暑い日々のあとに温度が下がることが多く今年の秋は紅葉がきれいだそうです。身近な場所でも、また旅先でも短い秋を堪能したいですね。季節はあっという間に冬になり寒い日々が訪れますが、暖かい部屋でクラシックと共にしみじみと過ごすのもいいですね。是非ナクソス・ミュージック・ライブラリーでお楽しみください♪(O)

オケに魅せられて

(スタッフ・U)

音楽とわたし

少し緊張して曲目解説を読み舞台上の椅子の配置から楽器編成を想像し開始の時を待つ。楽団員が楽器と共に登場し着席。コンサートマスター(またはミストレス)による調音。満を持して指揮者を迎える。この調音の時が大好きである。今日はどの時代のどの国に連れて行ってくれるのだろうか。演奏者達の情熱がホール中に満ちていき、音のシャワーに包まれる。やはり生演奏にかなうものはない。規制緩和により久々に行くことのできた社会人オーケストラの演奏会は感慨深いものであった。「いつの時代にもどの場所でもどんな困難の中でも人間はさまざまに歌を歌い音を奏で暮らしを彩ってきた。この困難な時代にあっても音楽と共に歩いていかねばなるまい。」というメッセージと初めて演奏を見た(聞いたではなく)アンコール曲のジョン・ケージの『4分33秒』。新たな変異株への決意表明と受けとめた。

